

ITS Meeting@佐賀 成果報告書

今井むつみ研究会 山崎・高橋・吉田・小川

日時：2011年11月18日（金）

場所：佐賀県多久市立納所小学校

会の概要

- ・納所小学校全校調査会
- ・「Let's 多久学」探究的な外国語活動, 研究授業
- ・佐賀県教職員研究部会
 1. 多久市外国語部会授業研究会
 2. 講演「子供が学び続ける原動力を創るには」慶應義塾大学 今井むつみ教授

社会において求められる人材像は絶えず変化し、教育のあり方も絶えず変化する。テストで点数をとるために学ぶのではなく、学ぶことでどのような考え方、認識を持つことができるのかということがより重要となってくる。また、そのための基礎研究をどのようにして教育実践へと生かすのか。この問題は自然科学だけでなく、認知科学や社会科学にもあてはめることができる。今井むつみ研究会では、認知科学の視点から「人はどのように学ぶのか」研究を行い、そして実践活動の一環として教育現場の調査研究並びに2ヶ月に一度教員と研究者を交えた研究会を行っている。今回は、佐賀県多久市立納所小学校における実践を調査、また認知科学における学びの先端研究を紹介し、研究者と実践者の交流を行った。

1. 納所小学校全校調査会

全校調査会では、生徒たちがどのように学んでいるのかということ进行调查した。具体的には認知科学の理論において重要な現象がどのように引き起こされるのかという視点から生徒の行動をつぶさに観察、記録した。そこから教師は懇切丁寧に生徒にすべての情報を“与える”のではなく、教師は説明の途中で生徒を待ち、生徒が続きを発言したくなるような、“引き出す”姿勢を持っていて、という重要な示唆が得られた。

現行の教育実践においては特殊な小学校であることは確かなことではあるが、生徒たちの「あきらめずに学ぶ姿勢」がにじみ出ていることを体感することができた。

2. 「Let's 多久学」探究的な外国語活動, 研究授業

佐賀県多久市立納所小学校の岩崎達義教諭は探究的な学習を実践している先進的な教師である。今回は納所小学校の所在する歴史的な偉人を多数輩出している「多久市」という地域の歴史を有効活用した外国語活動(英語)が研究授業として実践された。つまり多久市の偉人や市の歴史を英語で生徒に紹介する試みである。授業には5,6年生たち参加したが、特に6年生が以前に総合的な学習の授業で得た知識を利用する姿をみることができた。また、

英語で話し続ける岩崎教諭に臆面もせずコミュニケーションをする生徒の姿もあった。

この研究授業をもとに、その後の研究会では「外国語活動はどのように行えばよいのか」というテーマについて議論が行われた。

3. 佐賀県教職員研究部会

3.1. 多久市外国語部会授業研究会

今年度から小学校教育へ導入された外国語活動は小学校教員にとって未知の領域であり、どのような授業を行えば良いかわからないという状態になっている。そこで、外国語活動研究の一貫として今回、多久市の小中学校の教員、教育委員会職員、市役所職員、我々今井研究会によって外国語活動・研究授業ならびに研究会を行うこととなった。



深く議論を掘り下げるなかで、議論と中心となったのは、簡単な挨拶や、アルファベットが読めるようになるレベルの話ではなく、英語という“外国語”に触れることによって、中学校から本格的に英語を学んでいく上での素地、英語だけでなく学ぶ姿勢、コミュニケーションをする姿勢を作ることが、小学校の英語教育には求められているのではないかということだった。外国語に慣れ親しむことが、苦手意識、嫌悪感や戸惑いを払拭し、能動的に外国語を学ぶ姿勢を作ることができるのではないか。今回、研究者と実践者が集まったからこそ、こうした教育にたいして有効な示唆が得ることができたといえる。

3.2. 講演「子供が学び続ける原動力を創るには」

慶應義塾大学 今井むつみ教授

認知科学の先端研究を紹介し、学習とはどのように行われるのかというレクチャーが行われた。その中で今井むつみ教授は今回の研究授業からの示唆も絡めながら、認知科学の学びからの視点を提供し、よりよき教育像について考えるきっかけとなった。人の学習への知識をもちつつ教育現場の教員は実践を行っていくことで、より生徒たちに則した学習を実践する助けとなると考えている。



4. まとめ

研究者と実践者のコラボレーションから得られる示唆は多く、今後もこうした取り組みによってよりよい教育像とはどのようなものか探究していく。また、地方と都市の情報格差ということも問題となっているため、遠くとも現場に訪れ共に考えることが大変重要なことである。